

雑詠日記

海蝶夢話

卷の五

二〇一〇年



M・プランシヨは『文学空間』で、「詩句とは、経験であり、この経験は、或る生き生きした接近に、真率に刻苦して生をおくるときに果される或る動きに、結びついている。唯一行の詩句を書くためにも、既に生を味わいつくしていなければならぬ。……唯一行の詩句を書くにも既に芸術を究めつくしていなければならぬ。芸術を探求しつつその生を味わいつくしていなければならぬ。……芸術とはひとつの探求だからだ、……生の全体の中を通過している探求だからだ」と言っている。

この定義に従えば、この雑詠集にわたしが書きとめている片々の語句は、詩句とはとうてい言えない。尻尾を巻いて退散しなければならぬ。ただこの国に長く続く習慣に倣って、心に浮かんだものを言葉に表わしているにすぎない。しかし、プランシヨは上の文に続けて、A・ジツドの「書物は、われわれから生まれ出つつ、われわれを変え、われわれの生の歩みを変容させる」という言葉を引用して、「書くことはわれわれを変える。われわれは、自分が現にそうであるものに従って書くのではなく、自分が書く者に従って存在するのだ」、とも言っている。こちらの言葉にすぎれば、わたしが書きとめているつぶやきの中から、いつか詩句に近いものが生まれるかもしれない。わたしは雑記帳を書くことで、ささやかながら、自分を変えようと願ってきたのだし、生を少しでも味わおうと考えてきたのだから。

蝸牛の歩みが続けてみよう。

一月三日
ショートステイ母送り出す天気よい正月三日ここに諸事ある

一月六日
・
・
・
・
・
・

世界には腹をすかせたものもいるんだね

世界にはいろんなことがあるんだね

世界はひろいんだね

・
・
・
・
・
・

いい話だね

うん、いいはなしだね

絵本読み共に眠りに冬の夜

一月十三日
陽光に始終をゆだね雪の舞い

内海を利休ねずみに寒の雪

一月十五日

隼よ、「はやぶさの使い」
隼よ、わたしたちはまだ

ここ第三惑星にいる

もはや帰還はむつかしいだろう

と思われていたはやぶさの使いが

わたしたちと同じ引力圏に戻ってきた

使者はこの世界に向かっている

使命は果たされることになるのだ

君も希望をもってよいのだ

わたしたちはそれぞれの使命を

果たすことができるだろう

空なる時空を渡ることができるだろう

一月十六日

寒暖に不出来のヒトの荷を負って

一月十八日

冬風の海が広がる胸の奥

ふくらんで波止場の鷗日向ぼこ

一月十九日

凍りつく想起の回路、鍵消える

一月二十日

江海の蝶いつくしみ寒ゆるむ

『杜甫 憂愁の詩人を超えて』という本を読んでいる。「自京赴奉先県、詠懷五百字」という詩は一度読んでいたはずなのに、ほとんど想い出せない。しかし、心の深いところに刻まれていたのだと思う。職を辞した後の挨拶状に陶淵明を引いて文を始めた時、ひそかに拙を守る決意であった。

この詩の書き出しの杜甫の気概に大いに感化されていたのである。註によれば、江と海は隱遁者の住む場所で、これも想い出せないけれど、『莊子』讓王篇に「江海の志」という言葉があるそうだ。意識せずに、生家の大字地名「白潟」と水路の名の「江の川」から、寓居を白江庵と名付け、号を海蝶としたのは、まことに適切であった。代々字「塩屋」に暮らした布衣の末裔が塩焼く者として、江海の志を実行するのである。

一月二十三日

肩越しに市のイカ買う寒の朝

一月二十四日

冬入り日朱の橋脚に宿りする

一月二十五日

正月の花濡れ縁に日を送り山からの鳥客に迎える

二月四日

新来の二ひきの鯉に今日からは人が余寒と呼ぶ寒さ来る

水仙を蝸牛の花器に、春立つ日

二月七日
春の日を迎える障子張り替える

新調の障子が光り余寒断つ

二月九日

一月余り姿を見せないので死んだと思っていた金魚が三尾姿を現わした。
ささやかな、しかしうれしい出来事。

水ぬるみ黄泉から金魚甦る

二月十三日

さるすべりの樹形整え夏に期す

紅梅の下につくばい篋置く

二月十五日

あらかじめ分かっていたことだけでも、晴耕雨読という言葉の「耕」の作業にはずいぶん時間がかかる。今日は、林檎と李の苗を植えた。それから、以前セメントを張った古い墓地にまた草が生え出したので、隙間をセメントで埋めた。作業を終えて海の方を見ると、山と海が夕陽に照らされて明るくなって、山を写すというほどではないが、べた風の海が招いて

いる。たいへん疲れていたが、運動靴をはいて波止場まで散歩。いつもの青鷺がいた。

残生を鷗に似せて春に会う

二月十八日

雪ひとひら天からはぐれ梅に着く

波光る逆光に立つわかめ採り

モンテ―ニュ像梅置く壁に微笑する

二月二十一日

萩市へ。笠山の眼下に輝く海、航跡を引いて港へ帰る漁船、沖に散在する大小の島々、遠く水平線に海と空が溶け合っている…

波光る椿の山の下の海

二月二十三日

荒れた田に鋤入れ柿の木を植える

夫婦して夫婦のキウイ植え付ける

根を洗い姫睡蓮をいつくしむ

二月二十六日

耕さず生えた竹伐り田を起こす

『凶書』、大木康という中国文学者の文に、「書物は、読み継がれることよつてのみ、あるいは解釈をかさねられることよつてのみ真の古典となりうる」と。わたしが今読んでいるのは、忘れ去られたL・アルチュセールの『マルクスのために』。

三月六日

文楽を観た。演目は、「卅三間堂棟由来、平太郎住家より木遣音頭の段」と「本朝廿四考、十種香の段と奥庭狐火の段」。人形遣いは人間国宝吉田文雀、大夫は豊竹咲大夫、三味線は竹澤団七。

文楽を観るのは初めてだ。やつぱりよく出来た演劇だと思つた。演劇の重要な要素はすべてここにあるだろう。音楽にのせて語られる美しい文章、視覚的に美しい舞台。そこには見せ場があつて、観ている人間の心をふるわせる。東西の演劇に共通のツボがあるといえる。その上に、文楽独特の特徴がある。曲が音色の限られた三味線でつけられる点は、一つの制約だろう。しかし、演ずる人形も人形師も語らないで、大夫が語るのはまさしく物語で、文章の美しさはいっそう強調される。人が操る人形が演じるといふことも、人間の行為が単純な主体ではなく主体外

三月八日

のものによって導かれる——という側面を浮かび上がらせる。

題材は過去にとつていているけれども、背景や衣装や会話は江戸時代のもので、観客は現代劇として観ただろう。その行動の仕方・所作は人々に影響を与えたにちがいないく、人々はそのようにふるまうことになっただろう。二十世紀にハリウッド映画がアメリカ人をそうしたように。その感性や心性も演劇と相互作用して、染め上げられることになったのだと思う。日本人が見せ場つまり節目で涙するくせは、ここで養われたのだろう。笑いを誘う演出もあるけれども、西洋人の闊達さや明朗さは、文楽や歌舞伎では得られない。日本の古典文学でもそういう精神は希薄であつたといふべきか。

近松門左衛門出生地という説にちなんで、こんな田舎に本格的な文楽の劇場が建てられ、こういう演劇が楽しめる。

よく編んだ言葉に乗つて人形が精神を得て舞台を動く

人形の童子母なる棟木引き舞台に創るカタストロフィ

文楽が日常性を解き放ち人を舞台の中に遊ばす

交差する雉とわたしの春の道

三月十四日

内海の奥にある遠浅の白濁塩屋に、海岸道路がつくられて三十年以上経つ。いつの間にかテトラポッドにワカメがついて、ワカメ刈りができるようになった。

わが磯でワカメ刈る身となる縁起

その息をくれたワカメを食とする

三月十八日

「津和野紀行一」

一泊で津和野観光に出かけた。近くなのに今まで行く機会がなかったのだが、経済の停滞の中で観光業も生き残りをかけているのである。一泊二食付き六千円という宿を見つけて出かけた。

鷗外の写真は歳をとってからのものをいつも見ていたけれども、若い時の写真は当然ながらまだ未完成さをとどめているように見える。改めて老成した写真を見ると、明治・大正という時代の人の顔なのだと思う。森林太郎という人間として死ぬという遺言の言葉が伝える、基層にある武士の面構えとも見えるし、軍医として最高位に登り学士の最重鎮であったという人物の風貌もしている。そして優れた作品を生み出した精神が、この顔ににじみ出ているはずなのだ。一人の人間の顔を読むのは難しい。

三月十九日

この町は、城山のある西北の山の連なりと東南の山並みとの間を流れる川に沿う狭い平地にある。こんなところに城下町があつて、そこから西周や森鷗外といった人物が出たというのは、軽い驚きを生じさせる。もうひとつ、乙女峠というロマンチックな地名をもつ場所に建つ、マリア聖堂を訪れた。小さな谷を上がるところに寺があつたらしい。そこへ、幕末長崎で発覚した隠れキリスタンの捕らえられ、一つのグループが幽閉されたのだ。大佛次郎の『天皇の世紀』を読んで知っていたけれど、復元された一辺三尺の檻を見て、三十六名の殉死者のことを改めて考えさせられる。その出来事を、わたしはこの小さな山間の城下町という社会の条件と結び付けて考えた。しかし当時萩藩にもキリスタンが収容され、拷問が行なわれたということだから、その考えは当たらないのかもしれない。萩での殉教者のことは多く語られていなくて、どういう差があつたのかよく知らない。

春雨に太った鯉がちじこまる

朝霧が清めた後の山桜

花放ち静まりかえる杉木立

「津和野紀行二」

雨が上がって上天気になった。リフトで城山に登る。案内板によれば、弘安の役の後（二一八一年）、能登の吉見氏がこの地の地頭として来たもの。筑前・長門への元の来襲を見て、防衛のために山城を築いたのだと書いてある。こんな山奥にそういう目的の城を築いたというのは、少しおかしい気もする。確かに攻めにくい要害である。大内・益田の軍に攻められたが、百日間籠城して持ちこたえたというのもうなずける。有名な坂崎出羽守がこの地に封ぜられたときには、防長二国の毛利への備えと意図されたであろう。もっとも後に来た亀井藩は、長州戦争のとき、毛利藩と戦うことはしなかった。村田蔵六率いる長州兵はそのまま通過して進撃し、浜田藩主は退散した。その時代に、この山城は形勢を変えらるほど頼りになるものではなかったわけである。

夜が明けてこれを書いてるわたしの記憶は混濁していた。初めに訪れたのは永明寺であった。境内にある説明板によれば、この寺は道元の孫弟子であった人の開山で、江戸時代の盛時には常時二百人の修行僧のいる曹洞宗の禅林だったらしい。藩主の菩提寺として力があつたのであろう。今は藁ぶきの大屋根が盛衰を物語っている。観光客も少なく、再建の困難さが推測される。山門を出る前に気づいて、有名な「森林太郎墓」と刻んだ墓石の前に立った。そこを出て谷を下るすぐ北側に、永明

寺の末寺がある。その本堂前を通って右手奥にも古い墓が並んでいる。享保というような昔の年号が彫ってある。観光案内図にはこの奥に亀井家墓所があるはずなのに見通せない。ちょうど山道が西に折れた上で墓掃除をしていた夫婦に尋ねたら、やはり上の方にあるとのこと。墓所は低い塀で仕切られていて、門の横木が上に渡してあった。四万三千石の家格に合ったものであろうか、それほどお金をつき込んだ墓所ではない。それでも墓石は、そこまでの径の途中にあったものに比べれば大きく高い。因州、老州、豊州、隠州などの前太守と刻んである。今は手入れも行き届かなくて、塀の一部はくずれている。

杜塾美術館というところにも寄った。そこは領国内筆頭の大庄屋の屋敷跡。森村と呼ばれた村落に属したらしいのに、城下の通りに面し、藩筆頭家老の屋敷と二百メートルも離れていない。盆地に何層もの序列の家臣団と大庄屋以下の領民が住んでいる小社会を、君主が支配していたのである。今から思うと、その社会は変化の乏しい息苦しいものであったろう。この美術館に、津和野出身の中尾彰という画家ともう一人の女流画家の作品が展示してあった。絵は油彩が主だが、日本画的な要素もある。淡い明るい色彩の絵だ。津和野にもう一つある美術館の、安野光雅の絵と趣が違ふ。土間を上がると、ゴヤの銅版画が展示してある。奇

妙な対照だ。「闘牛シリーズ」四十点がそろった貴重なものだと言明してある。近代的な個人として偉大な画家になったゴヤのこれらの絵は、闘牛のさまざまな場面を見事に表現して、その眼と技量を、わたしのような者にもはつきりと示している。

百五十年ぐらい経つという立派な和風建築の座敷と庭を見ていたら、受付にいた女性がやってきて説明を始めた。かつて藩のために藩校養老館を寄進したほどの大庄屋の家も、敗戦後の農地改革で没落し、家を継ぐ人も絶えた時、ホームセンターを建てるために買い取られた。ところが、古い屋敷をとり壊すのはもったいないという声が上がって、計画を美術館に変更したのだそうだ。ゴヤの絵は、その会社の創業者の收藏品なのだ。その人も島根県出身で、以前は菓屋をしていたというところで、座敷に菓箱が置いてある。案内の女性は話し好きで、菓を小分けする手法が、ホームセンターの仕分けとよく対応していたのだと言った。さらに、この間の総選挙で殿さまの子孫が落選したことも話してくれた。歴史的に在る現代の世相の一断面を示すエピソードだ。現代の選挙の諸相を垣間見せ、選挙に出る人の動機や選挙民の反応まで、いろいろな思考へ誘う。鎌倉時代に地頭がこの地に來て以来、政治・経済の体制は変遷し、経済社会は変化を幾度も遂げて、上層に位置する人々の盛衰を繰り返してきたのだ。

昼食後、西周旧宅へ。鴉外旧宅よりも小さい茅葺の家だ。西周はその土蔵の三畳の間で勉強したのだという。もつとも屋敷内は九百平方メートルあったというから狭くはない。今隣地は田になっている。西周も森鴉外も医者之家に生まれた。当時諸藩に仕える医家はもつとも教育を積む知識人であった。西周はその中でも、向学心にあふれ素質豊かな人だったのだ。蘭学を学び蕃書調書に出仕し、オランダに留学したことが、この人を開花させる。狭い盆地社会に生まれた人が、世界に眼を開かせられ、飛躍することになった。その知性が、哲学・理性・主観など、数え上げれば眼を見張るほどの言葉を創り出し、近代以後の日本人の思考を発展させた。江戸時代の教養は、新しい造語を中国人にも受け入れさせるほど優れたものであった。三十年後の鴉外はその影響圏の中で前進したと言えることができる。

感慨にふけて少し時間が経って車に戻ったら、家内がわたしの遅さに腹を立てていた。

三月二十一日

荒れた田の茅抜きよもぎ摘む暮らし

(わらびも)

三月二十六日

人は皆自己に身近なことだけを話題に選びその日を過ごす

三月二十七日

また一つ孫に教える土筆摘み

三月二十九日

春北風に社の狸は磯遊び

(対岸へ孫とドライブ)

三月三十日

涅槃忌の故郷の干潟アサリ採る

四月三日

かじつたに過ぎないけれど、岩波文庫『道元禅師語録』を読んだ。

曹洞宗の得度を受けて叢林で修業した良寛が、道元を深く学んだことは疑いえない。これらの語録と和歌を読んでいたことも確実だ。参禅において道元を追求しながら、孤独な雲水の道を選んだ良寛はおのずと異なる道程をたどることになった。この書物を読むまで、良寛と道元のつながりを本当には知らなかった。しかし、仏者にとつては付随的な文字である偈頌と和歌を見れば、良寛への影響は明らかである。良寛は、道元の偈頌と和歌の遺集に促されて、彼の詩歌に発展させたのだ。

ひるがえって『傘松道詠』を読むと、道元の和歌に驚かされる。ほとんど漢語で構成したこの『語録』や、あの論理の跳躍する『正法眼蔵』の文章には表われない道元的一面がほの見える。京都の公家の出という出自が、平安の文化に育てられた文章と感性を道元の基礎にしたということが知られる。和歌はたしなみとしてあっただろうし、日本の古典も

四月四日

読んでいたであろう。道元の和歌は、その伝統をはみ出すものではなかった。しかし、修行僧として、「徒に過す月日はおほけれど道をもとむる時ぞすくなき」といった、自省の歌などもある。あの厳格さを追求する思考の背後には、五七の調子もあつたということだ。「あらたふ」という出だしの歌もある。日光で詠んだ句に推敲の末にこの言葉を選んだ芭蕉は、『傘松道詠』を讀んでいたのだろうか。

菜の花に華やぎ譲る赤鳥居

鶯の声聞き分けて孫の笑み

「ばかなこと言うな」と孫に諭される街道の春樂しむ会話

身体の強い震えを体験し覚醒もせず春の日の下

おととい、原因も分からず四十分余りも手足や体が震えるという恐怖に見舞われた。ちょうど来ていた娘が救急車を呼ぼうというほどだったが、意識はしっかりしていたので、家内に車で病院へ連れて行ってもらった。診察時間が過ぎていて医者に診てもらうのに手間がかかる間に少しずつ落ち着いた。内科医との話で、今朝咽喉科で処方された扁桃炎に対する抗生

四月七日

骨拾う床に桜の花を踏む

剤のせいらしいことが判明した。初めての体験は、言葉通りのショックであった。

夕方、もつとも近しい年長の従兄が亡くなったとの知らせ。

四月十四日

諸事あつてたいへん疲れている。夜、テレビでやっていたネパールとチベットの二十年ぐらい前のドキュメンタリー番組を見た。今のわたしから隔絶した生活を見て、生きるとは何か考えさせられた。口減らしのためにカトマンズの尼寺へ入る八歳の少女。出発の前夜、両親が干し肉を食べさせ、特別に三個の卵を与えると、少し食べて弟と妹に分け与える少女の顔に微笑さえ浮かばない。その生活の不条理に耐えてカメラを見つめる眼が、わたしの今の在り方を鋭く射抜く。

天空に生きる生き物そして人、生とは何か問いかけてくる

ハイラス山ただおごそかにそびえ立ち見上げる者を釘付けにする

四月十五日

共鳴しうたた寝脳は夢も見ず

(髄膜腫の定期検査)

四月十八日

木々植えて氣候不順の春過す

いづくしむことか四月に梅を伐る

潮風に病んだつつじを転地さす

転地して変わる暮らしにとまどいつ模索している人の生き方

四月二十日

蜘蛛の網が捕らえて光る春の雨

四月二十四日

親族の葬儀が続く寒い春

人生の生と死を見て立ちまどう

四月二十六日

また上海に來た。去年の使命の続きを果たすために、一か月滞在する。

四月二十八日

江南の春はたけなわ楠落ち葉

おぼろ月夜間工事のビルの上

四月三十日

CCTVニュースで上海世界博覧会の開会式典を見た。

上海は盛者の春に夢心地

五月二日

長江河口と海を見に出かけた。霧のため船が運休したので、長与島へのトンネルをくぐり抜け、橋を渡って崇明島へ。東灘という土手の築いてあるところまで行つたが、その先も葦の原が何キロメートルも続いていて、東の海を見ることはできなかった。

長江に架かる大橋かすむ春

東灘でなお海を見ず葦の原長江河口大いなる島

五月三日

陽光の五月樹上の生活者

「私は国語のリズムの基本的形式より見て、五音七音は、詩歌の進行的リズム形式の単位と見るよりも、詩歌の建築的構成的美の要素となるものであると考えたい」——時枝誠記『国語学原論』

五月九日

宿舎のある開発区の南方を東流する黄浦江上流まで、遠い道を散策。

五月十二日

ホトトギス鳴く紫月路に異邦人

尋ね来た荷船行き交う黄浦江歴史重ねた水運の国

「空中劇場」

夜、CCTV十一で『宇宙鋒』という京劇を観た。あの趙高の娘が主人公。有名な奸臣に名を借りた劇なのだろう。娘の名は艶蓉となつている。父が政略結婚を図り、娘を政敵の息子「匡忠」に嫁がせる。しかし舅は趙高に加担せず、罪を着せられて処刑される。夫の匡忠も追手を差し向けられるが、身代りが切られたのを利用して、いつもそばにいる賢い唾の乳母の機転で逃れる。

ここからの艶蓉は、黒に近い濃紺の喪服とおぼしい衣装で、短くした髪にかんざしも挿さない姿で登場。舞台に置いてあるのは卓と椅子だけ。その演出はかえって、女優の容姿を際立たせる。演者の演技力の見せどころなのだ。若い女優だったが、見事に演じ美しかった。

艶蓉は父に、匡家の遺族への寛大な処置を受け入れさせる上奏文を書かせる。そこへ忍びで来た二世皇帝が、艶蓉の美貌を見染め、後宮にさし出すように命じると、父はその命令をむしろ喜ぶ。ところが艶蓉は、狂人になつたふりをして、その命令から逃れようとする。二場の長いク

ライマックスだ。女優は、底に湛えた嘆きの表情の上に狂女の笑いを浮かべたりしながら、さまざまな姿態を演じる。皇帝の前に引き出された艶蓉は、さらに危機的な場面で、狂女を装いながら、前帝の時代の国の繁栄に比べての現在の悪政を痛烈に批判する。それは、群臣に鹿を馬と言わせるほどの権勢を誇る悪宰相の父を批判することでもある。皇帝は兵に成敗させようとするが、艶蓉の必死の演技が勝つて、それを切り抜けて終演。この場面の美しさは、観客を感動させずにはおかない。

このような女優の演技の立ち勝る京劇を観た後には、近代中国が女形をやめたことが賢明であったことが知られる。人形浄瑠璃でも大いに感動できるのだから、女形が普通であった時代にはそれで観劇は楽しめただろう、劇は尋常でない場面で人間を照射するのだから。しかし、一度女優の舞台を観れば後戻りはできない。ひるがえって日本の歌舞伎を見れば、それが守旧的だと判る。歌舞伎は限られた家系の俳優が重要な役を独占している。女形をやめて一旦女優を導入すれば、演技が優れ容姿のいい人が求められるのは自然の勢いだ。そうすれば、特定の家系の人々による役の独占はくずれるだろう。現代の歌舞伎界は、経済基盤としての家業を守ることを第一の原理としていると言える。日本の社会に根強いこの種の家元制度は、人間の習慣性と社会の許容度がそれを許すのだ。そして、能のような、ひよっとしたら観客を多く得られなくて、経

五月十四日

上海世界博覧会を見物。無句。

五月十五日

「夢の話」

夜中に不思議な夢を見た。人の遺体が焼けるようすであつた。火に焼かれて無くなつていくのが、竹が焦げてしだいに短くなつていくイメージとしてあつたように思う。詳しくは想い出せない。

二か月の間に三度斎場で人が焼かれて骨拾いをしたことが、今頃になつて疲れた身体に夢となつて表われたものか。死というものを正視させる表象を得たわけだ。二つの眼たちまちに閉じ、一つの息永く止めば、人体はそのようなものとなる。焼かれて、骨とわずかな無機物質の灰が残し、水蒸気と二酸化炭素と窒素や何やかやの気体となつて、夜半の煙と化す。昔の人は明確には知らなかつたけれど、それらの分子や無機質

濟的に成り立たなくなるかもしれない芸能が、一定水準で継続できるようにしたのである。

ストーリーがよく知られている伝統芸能で、同じ舞台を観ても人が感動するのは、運命というものが人を感慨に誘うからだろう。人間たちが関係しあう場面の中で、一人の人間がどのように、半ば決定されていると感じる関係に立ち向かうか、ずいぶん現実離れして劇的に組み立てられた舞台に、感じるところがあるわけだ。

は他の生物や人となって、また別の生命活動に参加することになる。

この表象は、命のあるときの人の「生₁」生きる活動」を反省させるために現われたと考えるべきだろう。脳と神経系に構造化され、習慣的に思考と行動を発動させるシステムの価値が問われるのだろう。人生の意味や価値を反省して、システムを修正していくことが、人生の王道だろう。ヒトという生き物は、家族の関係の中で、さらに社会の中で生きるから、その人間関係は人の生き方に不可分の要素としてある。人生の意味や価値の一部としてあるそれらをひつくるめて、今をどのよう生きるかがよいかという問いの前にいつも在るわけだ。

形而上学的な思念はその先の境に真理を追究するのだと思う。生きていて悟った人になること、悟りを得ることは、人の願いであるけれども、思念によっては大悟できないと禅師は言う。ゴータマ・シツダルタは、「ただ「努め励む者は幸せである」、「自己を灯として、サイの角のように歩め」と勧めた。その道がよいと確信して、歩むことにしよう。

五月十八日

キャンパスに若いカップルすでに夏

江南の薔薇をなだめて霧降りる

五月十九日

薔薇散つて思源の池に立つ波紋

沖繩に連なる雨の前線がうかがう北の長江河口

五月二十四日

業終えて柳の陰で風を見る

夕陽射す梢に住まう鳥たちと五月の日々に別れを告げる

二十五日、帰国。

池の噴水の栓を忘れて四五日留守をした間に、塩素にやられて、鯉・金魚・めだかが全滅。かわいそうなことをした。

六月三日

六月の日が落ち畑へ出る夫婦

内閣は再び頓挫この国に危機は深まり人捜す天

六月七日

対岸を照らし虹立つ初夏の暮れ

六月十三日

雨季に入る前に草刈り柿守る

六月十四日

宮崎県の口蹄疫は収まるように見えたが、南に拡大してまた対応に追われている。今読んでいる本のタイトル『銃・病原菌・鉄』のうちの病原菌がここに現われている。人間が家畜を飼うようになって以来、他の動物由来の病原菌が人間にも感染するようになり、人間の歴史の展開に影響を与えた。口蹄疫はまだ人間に感染しないが、そのことを思い出させてくれる。

人類の先史を想い鎌を研ぐ

掌に受ける、つぼみで果てた睡蓮を

あかがねにカシワバアジサイ挿し入れる

六月十八日

死に絶えた池に金魚をまた入れるいのちにぎわう庭を目指して

井戸端に青大将の紗の衣

小庭の楓は雛を收容する

(メジロの)

六月二十四日

くちなしの清らかな花が語り出す

六月二十九日

波一つ無い梅雨の海行く漁船

雨あがる海に光の柱立つ

六月三十日

風ぐ海が暮れる あじさい伐り残す

七月一日

梅雨晴れ間実生のぐみを植え直す (向こう見ずにも紀行文を書き始めた)

七月五日

風の海を見る姫睡蓮の紅の頬

七月十五日

鳴る神が大雨落とす海静か (昨日、鉄道・道路が遮断され市は半ば孤立)

七月二十二日

廃屋にからまる蔦になった夏

廃屋のうしろの森に潜む夏

七月二十三日

クマゼミが一楽章を歌いきる

七月二十六日

夏の陽に溶ける海原見島見る

人を射る陽射しに海は沐浴す

海棠を食うな蝶の子猛き夏

八月四日

葬送の覚悟促す医師の声聞き分けもせず手の動く母

八月五日

朝ぼらけ日が改まり蟬の関

夏の朝諸事よく運ぶこと祈る

八月八日

源郷の海に体を浸す今朝

八月十二日

空蟬は老僧が捨てた糞掃衣

僧の身を棄てた愚禿に秋の風

老いてなお苦海に沈み渡る者

八月十五日

立秋を押しやる猛き夏陽射し

八月十七日
一夏を早に焼かれ過す日々

打ち水も無駄に手植えの槿枯れる

八月十八日
海に入り捕らえた蛸を放生す

夕立のおしめり枯れた槿が泣く

八月十九日
内海が公案として在る夏の暮れ

(『本』の「眼蔵をよむ」第八十八回)

八月二十四日
盆の月わたしの影を踊らせる

月に手をかけ踊る輪幻視する

八月二十六日
わが磯でうなぎを捕らえ暑氣払い

八月二十八日
猿饅頭買いに街道よぎる猿
(三猿饅頭)

猿もいる遠い野分けの揺らす森

九月一日 異常氣象雨読の雨も降らぬ秋

九月五日 炎天にさまよう秋の薔薇を伐る

炎天の秋を持久の日々となし大陸紀行文章にする

九月七日 ようやくに百日紅が咲きそろいわたしも書物広げるゆとり

九月八日 秋風に記憶が潰えたじろげわが海棠が花を一輪

九月十一日 虫の音と夜風を床に招き入れ眠れぬままに巡る想念

九月十九日 真夏日の残暑みかんを食う時世

片隅で一日の生、花芙蓉

九月二十二日 待望の雨に塩屋の萩重く天地と海に対峙して在る

雷鳴に震えぬ萩は海を見る

九月二十三日

北風が秋へと海の色変える

青北風が残暑を払い秋分の満月隠す浦の夕暮れ

九月二十六日

草分けの気分畑の葛を刈る

根茎を縦横に張る葛たちは事物がいか_に在るかを示す

(その関係は表面では隠されている)

九月二十七日

老いながら小雨の中で栗を採る

九月二十八日

秋空へワルツで昇る対の蝶

畑打って心を亡じ小鯨釣る

十月六日

青大将わが芋畑の穴に入る

人参の種撒いて待つ冬の糧

十月七日

朝には葛を退治し、夕べには毬栗を採る、今日をよき日に

十月九日

彼岸花まだ咲く野辺に身を置いて縁起の網目さぐって過ごす

まだ咲かぬ葛を葬り老いている

十月十日

待つ雁は文携えず電信の幸いに会い愁眉を開く

日を終えた鷗かな愛しむ秋入り日

十月十二日

鷺と見る夕陽の照らすうろこ雲

(昨日栗を採り、今日は梅と李の剪定)

十月十四日

西流れ五ノットの潮古戦場おだやかな秋過す釣り人

十月十六日

菊咲かぬ東籬の先の海を見る

(重陽、百日紅の剪定)

海の青、木犀の金、わが天地

十月十八日

すすき穂のうしろの壁の肖像が頬笑みかけて読書促す

(モンテ・ニユ像の写真。今日は梨とぶどうの苗木を植えた)

十月二十二日

なおシテが木を植えている床の無い舞台にあつて今花在れと

十月二十六日

雪便り色とりどりの玉上がる

(ガリレイ温度計)

池内紀が「珍品堂目録」で、内輪な結社で自足する歌人や俳人の限界を批判しながら、戦争に入る時代に戦争賛歌で埋められていった歌誌への投稿をやめた無名の女性の、最近出版された歌集を取り上げている。わたしの雑詠も自己満足で活力を失っているのなら、やめる覚悟が要る。

この間、心を亡じる多忙。

十一月二十日

防腐剤塗ろう小春の小天地

さるすべり葉に再びの紅を得る

菊と座し東籬に上がる月仰ぐ

(太陰曆十月十五日)

十一月二十一日 対岸に出た秋の月内海に一筋の道示して招く

十二月十一日 田の跡で父の遺贈の仏壇の小ぶりの箱を燃やす冬の日

わが老いにまわりついた品々を整理する日々新たな事物

十二月十二日 山吹が黒い実結ぶ時に会う

(白い花の)

残菊とざくろを生けて深呼吸

今年予定していた屋外の作業が終わってほっと一息。

十二月十三日 冬迎え清めた池に百万の水輪広がりこの身に届く

十二月十五日 片々の雪内海に時刻む

十二月十八日

大掃除嘉永以来の埃吸う

(黒船の来た年嘉永六年と書いた高坏膳の箱)

何代も塵と積もった物捨ててわたしの中で何か失う

十二月二十日

霜月の月満ち歌う銀の海

十二月二十二日

青鷺と冬至の雨に洗われる

かけがえのない出来事を引き連れて冬至の入り日記憶の海へ

十二月二十六日

悲しみを降りしく雪が清めるか

十二月二十七日

年玉に絵本を買って温まる

十二月三十一日

一年のいなか暮らしを振り返り晦日の雪に身を引き締める

二〇二一年

白江庵

正月
謹製



『大学章句』 朱熹

いわゆる知を致すは物に格るに在りとは、われの知を致さんと欲すれば、物につきてその理を窮むるに在るを言うなり。けだし人心の靈なる、知あらざることなく、しかして天下の物には、理あらざることなし。ただ理においていまだ窮めざること有り、故にその知に尽くさざること有るなり。ここをもつて大学の始めの教えは、必ず学者をして、おおよそ天下の物につきて、そのすでに知るの理によりてますますこれを窮め、もつてその極に至ることを求めざることなからしむ。力を用うることの久しくして、一旦豁然として貫通するに至りては、すなわち衆物の表裏精粗、到らざること無く、しこうしてわが心の全体大用も明らかならざること無し。これを物格るといい、これを知の至るといふなり。

注釈、格は至るなり。物はなお事のごとくなり。

